

北前船と北海道

第3回 道東・道北編

高野 宏康 (たかの ひろやす)

小樽商科大学グローバル戦略推進センター 客員研究員

博士(歴史民俗資料学)。専門は、北前船学、地域資源論。全国各地の北前船寄港地・船主集落の調査と活性化事業に取り組む。1974年、「北前船の里」で知られる石川県加賀市橋立町生まれ。明治大学卒。神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程修了。地域レジリエンス株式会社代表取締役、NPO法人歴史文化研究所代表理事、北前船子どもフェリー使節団実行委員会事務局長、小樽市日本遺産ストーリー検討WG委員、おたる案内人マイスター。



1 日本海沿岸以外の道内各地と北前船

北前船と北海道の関わりは、道南や小樽、石狩など日本海沿岸を中心に紹介されることが多いのですが、実は北海道全域に寄港しており、ニシンをはじめとする道内の海産物などを本州各地に運ぶと共に、本州各地の様々な産物をもたらし、道内に暮らす人々の生活を支えていました。本稿では、道東・道北と北前船の関わり、そして、現在も各地にのこる北前船遺産を紹介します。

2 根室市と北前船

現在、最も一般的に知られている北前船主の一人、高田屋嘉兵衛(1769-1827)は、生まれ故郷の淡路島から兵庫に渡って北前船経営で財を成し、その後、場所請負人となり箱館に拠点(えとろふとう)を移して、択捉島航路を開

きました。嘉兵衛は、択捉島、国後島、根室で多数の漁場を経営し、北前船により各地で取引することで、さらに飛躍していきました。根室市内には、様々な高田屋嘉兵衛と北前船に関する遺産がのこっています。

根室市内の金刀比羅神社の創始は、文化3(1806)年、高田屋嘉兵衛が松ヶ枝町(ほこら)に祠を建立して金刀比羅大神(かんじょう)を勧請(さかのぼ)したことに遡ります。その後、天保3(1832)年、高田屋の場所請負人となった近江商人、北前船主の藤野喜兵衛が引き継ぎ、天保9(1838)年には藤野家が資金を提供して社殿を新築しました。安政2(1855)年、藤野家は同社に石灯笼(いしどうろう)を奉納していますが、これは金刀比羅神社境内最古の建造物です。明治6(1873)年、現在地に遷座する際、藤野家が私財を投じて社殿を造営しました。昭和61年、境内地に高田屋嘉兵衛(けんしやう)を顕彰する銅像が建立されています。



金刀比羅神社境内にある高田屋嘉兵衛の銅像。昭和61(1986)年建立。



高田屋嘉兵衛の所有船、辰悦丸の模型。1500石積み。北海道立北方四島交流センターニ・ホ・ロに展示。



金刀比羅神社に奉納された輪島塗の朱塗大盃。明治39(1906)年、輪島市の上野勇作が奉納。北前船によって輪島塗が根室にも流通していたことがわかる。

3 網走市と北前船

網走神社は、文化9（1812）年、前述の藤野四郎兵衛が網走川河口に漁場鎮護のため、小さな祠を建立したことが創祀とされます。藤野家は、商標を又十、屋号を柏屋と称し、場所経営とともに多数の所有船で北前船交易を行っていました。そのため、網走市内には、当時、航海の安全、豊漁などを祈願して藤野家やその関係者たちが奉納した船絵馬が多数残っています。弁天社（現・網走神社）には13点、稲荷社（鱒浦稲荷神社）に9点現存し、昭和54（1979）年には、その内17点が網走市指定文化財に指定されました。

明治2（1869）年、開拓使は北海道を11の地域（国）、86郡に区画して統治するようになり、網走は、北見国網走郡となりました。北見国は、現在のオホーツク総合振興局管内および、宗谷総合振興局管内のうち、幌延町と豊富町を除いた部分にあたります。明治5（1872）年、根室支庁に編入されると、網走村には出張所が設置され、明治13（1880）年には郡役所が開設されるなど、オホーツク沿岸地域の行政的な中心地となりました。当時、同地の住人の多くはアイヌ民族で、和人はほとんどが急場所請負人の藤野家の関係者でした。

藤野家は、文政9（1826）年、網走川河口に弁天社を建立し、オホーツク海沿岸での事業を本格的に開始します。幕末期には20隻以上の所有船で北前船交易を行い、蝦夷地最大規模の場所請負人となりました。明治以降、西洋型帆船への転換を積極的に進め、明治20（1887）年代には汽船も所有して太平洋航路にも進出していました。網走地域は、オホーツク・擦文文化

以来の長い歴史がありますが、松前藩、藤野家など和人の進出により、アイヌ民族は和人の交易や漁労に組み込まれていきました。

ニシン漁が衰退すると、藤野家は鱒浦に大規模な牧場を開設するなど、経営の多角化を進めましたが、急激な農牧業の拡大により多額の損失を出し、明治末期には事業整理に追い込まれました。藤野家は、網走橋の架橋や道路、まちなみの整備など、網走のまちづくりにも大きく貢献しています。網走市立郷土博物館には、船絵馬のパネル、船筆筒などの船中道具類、経営資料など、様々な北前船遺産が展示されています。

4 宗谷地方(枝幸町、利尻富士町、礼文町)と北前船

江戸時代後期、宗谷地方に次々と漁場が開かれ、藤野家の所有船が往来するようになりました。宗谷地方に建立された巖島神社など各地の神社に船絵馬が奉納されており、枝幸、利尻富士、礼文3町に11点が確認されています。奉納された時期は弘化4（1847）年から大正14（1925）年まで78年間にわたり、北前船が活躍した時代を今に伝えています。

枝幸の巖島神社は、宗谷場所を経営していた藤野家の支配人、吉井茂兵衛が文政2（1819）年に建立した祠が創祀とされます。天保4（1833）年、茂兵衛は明神鳥居を寄進しています。この鳥居の石材は藤野家の出身地である近江産で、宗谷地方に現存する鳥居の中でも最古のものの一つです。巖島神社の栄丸の船絵馬は、文久2（1862）年、同家所有船の船頭卯八が奉納したもので、弘化4（1847）年に同じく巖島神社の正



網走市立郷土博物館の北前船関連展示コーナー。網走神社、鱒浦稲荷神社に奉納された船絵馬がパネル展示されている。藤野家の資料も展示。



明治初期に使用された藤野家の西洋型帆船の模型。網走市立郷土博物館蔵。



枝幸町の巖島神社の明神鳥居。天保4（1833）年、藤野家の支配人、吉井茂兵衛が奉納したもの。枝幸町指定有形文化財。

直丸の船絵馬と共に、道内では貴重な江戸時代の船絵馬の一つです。

利尻島は、かつてリイシリ場所で、明和2（1765）年には近江商人の恵美須屋・岡田弥三右衛門、文政6（1823）年には藤野喜兵衛が場所請負人となっていました。当時、リイシリ場所内にあった奥の院、本泊頓宮、厳島神社には、藤野家および同家の支配人たちが奉納した御影石製の灯籠、鳥居などが多数現存しています。

広島県尾道産の酢瓶、越後産の松郷屋焼の焼酎徳利、鳥根県石見産のはんど（水瓶）など、北前船で運ばれたと考えられる陶磁器類が資料館に展示されています。北前船寄港地に見られる福井産の笏谷石は、本浄寺の墓石、本泊の石組みに使用されていることが確認されています。富山から伝来した南浜獅子神楽（南浜）、鳥取から伝来した麒麟獅子舞（長浜）は北前船の「海の道」によって伝わった民俗芸能です。

利尻富士町の石崎神社には、嵐に遭い生還したことを感謝し、明治30（1897）年に奉納した「難船絵馬」があります。「念神靈蝶導是避危難」と書かれており、必死の思いで神に祈り、突如現れた蝶の導きによって助かったことが窺えます。

明治25（1892）年、礼文町の厳島神社に奉納された住吉丸の船絵馬のように、明治期になると西洋型帆船の技術を取り入れて複数の帆を備えた合子船を描いたものも見られます。礼文島の香深、入舟地区にある厳島神社には7点の船絵馬が奉納されています。この厳島神社は、文化5（1808）年に藤野家によって建てら

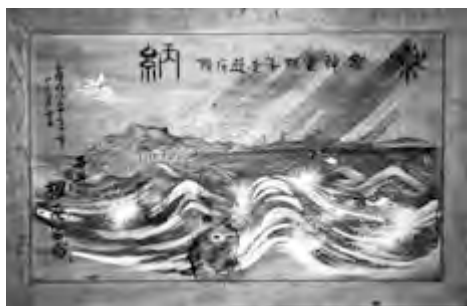
れた弁天社を起源とする神社で、明治28（1895）年に現在地に社殿が新築されました。

同社の船絵馬の一つに、明治25（1892）年、讃岐国三野郡（現・香川県三豊市）粟島の小売業者・岡松喜三郎が奉納したものがあります。粟島は、瀬戸内海の塩飽諸島に属し、北前船の寄港地として繁栄した島で、瀬戸内海から日本海を越えて礼文島まで往来していたことがわかります。この船絵馬は、平成30（2018）年には厳島神社に奉納された他の絵馬と共に礼文町有形民俗文化財の第一号に指定されました。宗谷管内5市町の船絵馬は、平成20（2008）年に宗谷管内5市町の連携巡回展で展示されました。

5 浦河町と北前船

浦河神社には、江戸時代以前のものだけでも50点近くの絵馬が奉納されています。北前船の船乗りが奉納した船絵馬は、天保10（1839）年、浦河に寄港した松尾丸の船絵馬が最初と考えられています。松尾丸は福山（松前）から訪れた商船で、清水善之助の名前が記載されており、帆には「ト」の印が描かれています。浦河には、干なまこ、フカヒレ、昆布、魚粕、干シタラなどの産物を運ぶために多数の船が往来しており、中には大坂、越後など本州の北前船の船絵馬も含まれています。

浦河の船絵馬に頻繁に登場するのは、萬屋の手船、長徳丸の沖船頭孝次郎です。萬屋は、場所請負制が再開した文化9（1812）年から浦河場所を請け負っていた福山の商人で、度々同地に寄港していました。幸次



明治30年、利尻富士町の石崎神社に奉納された「難船絵馬」。



住吉丸の船絵馬。明治25（1892）年、礼文町の厳島神社に奉納された。



浦河神社の社殿。社殿内には多数の船絵馬が奉納されている。

郎は信仰心の篤い人物だったようで、船絵馬の他、石灯笼1対、手水鉢なども寄進しています。

浦河神社は、浦河郡の惣鎮守で、寛文9（1669）年頃、松前の佐藤権左衛門が東蝦夷鎮撫の守護神として讚岐の金刀比羅宮から大物主命を勧請して祠を建立したことに始まります。また、享和元（1801）年、当時、浦河、様似、静内の三場所の請負人であった松前の佐野嘉衛門が京都・伏見稻荷から保食神を勧請し、稻荷大明神を建立しました。文化4（1805）年、当時、幕府から対ロシアの警護を命じられた南部藩は、浦河に会所を設けて兵300人程度で勤番をしていましたが、南部藩藩主、南部大膳太夫が家臣の一戸義左衛門に命じ、海上守護のため、安芸の巖島神社から市杵島姫命を勧請し、天女宮殿浦河大明神を建立しています。

天保13（1842）年8月15日、浦河の場所請負人であった萬屋の支配人、近江屋周助が、これらの3つの祠を合祀して、豊漁、航海の安全を祈願する稻荷神社と命名しました。商船の船絵馬が奉納されるようになるのは、近江屋周助が3つの神社を合祀して稻荷神社となって以降で、それ以前に奉納された船絵馬は1点のみです。明治8（1875）年、郷社・稻荷神社と公称し、明治43（1910）年に社殿を改築しています。昭和6（1931）年、浦河神社に改称され、現在に至っています。

6 苫小牧市と北前船

現在の苫小牧市周辺は古くから本州との交易が行われており、室町時代には福井県若狭地方との取引が盛んに行われていました。江戸時代後期になると勇払川

河口に多数の船が寄港し、伝馬船に荷物が積み替えられ、各地に運ばれるようになります。安政期にはイワシ、鰯、干鰯、雑穀類などが産出されましたが、特にイワシ漁が盛んで、東蝦夷地で最大の漁場となりました。これらの産物は勇武津に集められた後、松前・箱館に運ばれ、さらに京都や大阪、江戸へ運ばれていきました。

勇武津場所は、沙流から西は白老までの間13里余り（約53km）の海沿いの地域から、勇払川・千歳川流域を中心とするシコツ場所と呼ばれた16の場所を含む広大な場所でした。後にこれらの場所が統合され、勇武津場所となり、勇武津に運上屋、会所が設置されました。勇武津場所の請負人、山田文右衛門の祖先は石川県能登出身で、4代目の時、松前に渡りました。文政4（1821）年、8代目の頃、勇武津場所を請け負い、その後、場所請負制が廃止される明治2（1869）年まで、一時期を除いて継続しており、長期にわたって同地の交易に深く関わっています。山田屋は、漁場の経営を積極的に進める一方、開発を進め、10代目の頃、勇払から新冠沿岸にかけて昆布の養殖に成功しています。

明治2（1869）年、開拓使が設置されると、勇払に出張所が置かれていましたが、明治6（1873）年、出張所が当時の苫細村（苫小牧）に移転すると、勇払が交易・行政の中心だった時代は終焉を迎えました。苫小牧市美術博物館、勇武津資料館には、同地と北前船の関わりが紹介されており、錨や船名額、船筆筒などの船用品、陶磁器類などの北前船でもたらされた産物が多数展示されています。



浦河神社社殿内の船絵馬。



安政4（1857）年頃の勇払を描いた絵図。勇武津資料館のパネル展示。「蝦夷雑図」所収（佐賀県立図書館蔵）。



苫小牧市錦岡沖で引き上げられた江戸時代の和船の錨。苫小牧市美術博物館蔵。

【参考資料】根室金刀比羅神社、北海道立北方四島交流センターニ・ホ・ロ、網走市立郷土博物館、オホーツクミュージアムえさし、枝幸町巖島神社、利尻富士町郷土資料館、礼文町巖島神社、浦河神社、苫小牧市美術博物館、勇武津資料館の展示・資料を参照しました。取材にご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。